

どの年齢のこどもも思い切り体を動かせる環境を作るには

原町高校 3年 小椋 瑞姫

現状分析・問題点

- 市内のこどもが使える屋内外の遊戯施設は未就学児及び小学校低学年向けには「NIKOパーク」や「わんぱくキッズ広場」といった施設が充実している
- 一方で、小学校中学年から高学年においては部活動等で体を動かす機会が少ないうえに、年齢に合った屋内外の運動スペースが少なく運動不足に落ちる可能性が高い
- 福島県は全国的にも子供の肥満率が高く、文部科学省の「学校保健統計調査(2020年度)」によると男女合わせた10歳（小学4～5年生）の肥満割合は全国ワーストである



小学校中学年から高学年が気軽に運動できるスペースを身近に設けることでこどもの運動不足を解消する

週休日の9～17時に市内の体育館や小学校のグラウンドを 市内小学生向けに開放する

- 特に小学校に運動スペースを設けると、親の送迎を必要とせず自力で運動場所まで通いやすい

[課題]

① こどもの見守り

学校の職員に委託すると、負担や人件費の増加が見込まれることから
比較的人件費の負担が少ないシルバー人材センターに委託することで経費の削減ができる

② 運動スペースの維持費用

必要に応じて利用者から利用料をとる制度をつくる
小学生のお小遣いから支払うことができるようなるべく少額に抑える

③ こどもに何かあったときの対応

事前に学校経由でこどもの名前、住所、緊急連絡先を記すための「パスポート」を配布
運動スペースを利用する際にはパスポートを携帯させる
パスポートの確認は見守りの方が行う

身近に運動スペースができることによって

こどもの運動が習慣化、子供の運動不足を解消

保護者も子供が大人に見守られながら運動することで

公園まで送ったり遊ぶのを見守るといった負担が減る